

第1問 問1 a 案外 b さまた c 依然 d けいたい

問2 夜更け背後の雨戸の外が崖になって落ちこんでいる気がするよ。

焼失してしまった筈の本を今もあるかのように捜し続けるよ。

問3 体にかかわる意識は身体自体の記憶の中の過去に帰っていたため。

問4 「人は」過去に経験した「肉体自体の記憶を」「意識的に」記憶の対象としていなかった。

問5 記憶

第2問 問1 a 粘着 b 火鉢 c 獲物 d 浸透 e 形状

問2 私達の祖先からつくり出してきた物の中に、彼らがつくりたいイメージが、しっかり形となっているよ。

問3 日常生活の必要性などから身の回りのものを好きな形につくりたいという人間本来の欲求。

問4 食べている時だけ味わってすぐに消える美味という感覚。

問5 干す

第3問 問1 経宗 惟方などが指図して、堀河のさじきを板で外からしつかり打ちつけたこと。

問2 流罪に処せられた所で都へ帰るともなく、一生を終えること。

問3 二条天皇の親政を計画したこと。

問4 人は常日頃から、和歌を上手に詠むように心がけて励むべきだ。

問5 (イ) 大納言は大した罪を犯されなかったということであるのか。

(ロ) 別当は辛い目に遭ったといて剃髪して出家なされた。

(ハ) 同じ謀反を企んだ者達も事態が収まって都へ帰ると耳にした。

問6 A 指図して

B 噂した。

第4問 問1 亦た過ちならずや。

（解釈） 何とまあ間違っているよ。

寡人に四子有るは、猶ほ四肢有るがときなり。

（解釈） 私に四人の立派な臣下がいるのは、ちょうど四本の手足があるのと同じなのである。

四肢をして心無きと十有七日たらしめば、死せざらんや。

（解釈） 四本の手足を十七日間も心臓のない状態にさせると、必ず死にます。

問2 晏子の衣服や冠が乱れていたため。

問3 魚鼈も禽獣も、住み慣れた本来の場所を離れて慣れない場所に行くと、獲物として捕らえられてしまうとい

うこと。

問4 人…斉 心…景公

問5 斉の景公が狩りから帰って来ないことを晏子は諫めるが、景公も巧みな比喻で反論した。それに対しても、晏

子は景公の比喻を利用して諫め、結局、景公を狩りから帰すことができたため。